声なき感染症を知る◆37◆

# 〝風しんゼロ〟プロジェクト

## 県感染症情報センター

## 「東京五輪」に向けて

## 成人も予防接種を

▽2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて

2020年の東京五輪・パラリンピックに向けて、日本各地でさまざまなプロジェクトが進行しています。その中でも、皆さまにご紹介したいのは「〝風しんゼロ〟プロジェクト」。2020年までに風しんを日本から排除しようというプロジェクトです。

東京五輪・パラリンピックでは、多くの外国人が日本を訪れることが予想され、日本では流行していない感染症が持ち込まれる恐れがあります。そのため、風しんを含めて感染症対策が特に重要となります。

▽風しんとは

風しんとは、風しんウイルスによる急性の発（ほっ）しん性感染症で、流行する年には春先から初夏にかけて多くみられます。潜伏期間は2～3週間で、主な症状として発しん、発熱、リンパ節の腫（は）れが認められます。

風しんの症状は、子どもでは比較的軽いのですが、まれに（2千～5千人に1人くらいの割合で）脳炎、血小板減少性紫斑病などの合併症が発生することがあります。大人がかかると、発熱や発しんの期間が子どもに比べて長く、関節痛がひどいことが多いとされ、1週間以上仕事を休まなければならない場合もあります。

▽平成25年に大流行

平成25年には、患者報告数が1万4千人を超える大流行となりました。流行のピークは男性患者で第19週（5月6～12日）、女性患者で第21週（5月20～26日）、つまり今ごろの時期です（グラフを参照）。

奈良県でも1年間で約180人の患者発生が報告されました。この年の風しん患者の8割以上は成人で、特に20歳代から40歳代の男性が流行の中心でした。

その後、今のところ風しんの流行は収まっており、平成26年には全国で三百数十人、平成27年以降は年間に百数十人の報告となっています。

▽先天性風しん症候群

風しんが流行する時期に妊娠初めの20週までにそのうち一つか二つだけを持つ場合もあり、気付かれるまでに時間がかかることもあります。

先天性風しん症候群が起こる可能性は、風しんにかかった妊娠時期により違いがあります。調査によって25～90％と幅があります。特に妊娠初めの20週までにその可能性が高いことが分かっています。

平成25年前後の風しん流行では、24年から26年にかけて全国で45例の先天性風しん症候群の発生が報告されました。

▽予防接種の重要性と〝風しんゼロ〟プロジェクト

国は平成26年3月28日に制定した「風しんに関する特定感染症予防指針」の中で、平成32年度（2020年度）までの風しん排除達成を目標として掲げています。

また、日本産婦人科医会は、風しんの流行を抑制し、先天性風しん症候群の赤ちゃんの出生をゼロにするため、関係機関に呼び掛けて「〝風しんゼロ〟プロジェクト」を立ち上げました。

今年から2020年まで、毎年2月4日を「風しんの日」とし、2月を「風しんゼロ月間」として、情報発信、啓発活動を行います。

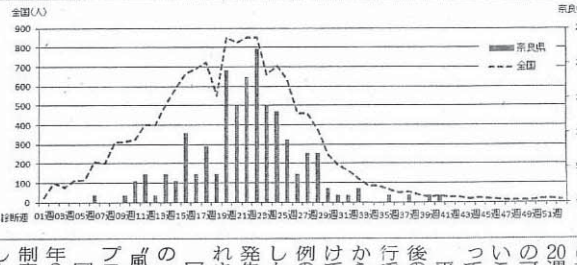
感染力の強い風しんの予防とまん延の防止には、予防接種により免疫を獲得することが最も有効です。現在は全国的に風しんの発生が少ない状況ですが、世界中で患者が発生しているため、海外から感染が持ち込まれて流行する危険性があります。

小児の公的予防接種（1歳児と就学前の2回）の確実な実施はもちろんですが、成人男性の接種も重要です。前述のとおり、平成25年の流行の中心は成人男性で、風しんに対する抗体を持っている人が比較的少ない世代であることが分かっています。

抗体検査によって自分が免疫を持っているか調べることも重要です。妊娠中は予防接種を受けられないため、将来妊娠を希望する女性は、あらかじめ抗体検査を受けて確認しておくことをお勧めします。

（県感染症情報センター）

＝第2木曜日掲載＝




平成25年の風しん患者報告状況（感染症発生動向調査から）